

「国史」と「歴史」の間

劉傑

一 なぜ「国史たち」の対話なのか

最近の10数年間、東アジア三カ国の「歴史認識問題」をめぐる対話はさまざまな成果を生み出した。日中間の歴史対話のなかで、もっとも注目されてきたものは2006年から08年にかけて行われた共同研究である。2006年10月安倍総理大臣が訪中し、日中首脳は、両国の有識者による歴史共同研究を年内に立ち上げることで一致した。同年12月から08年12月まで、合計4回の全体会合を実施し、2010年1月、両国委員による自国語論文、9月には翻訳論文が発表された。日中関係史上、このような試みは初めてであり、その意義は大きい。

違う国の研究者同士の「対話」は、2つのレベルから理解することができる。1つは研究会や学会などの場を利用して直接会って意見交換し、共同研究を行うことである。もう1つは研究成果を媒体として相手と間接的に対話を絶えず行うことである。先に述べた日中歴史共同研究は、回数は少ないものの、国史研究者同士が直接対話したことは、大きな前進である。近年、このような対話はさまざまな形で行われ、相互理解も深められてきたのは事実である。しかし、共同研究の近代史部分の研究報告を確認すれば分かるように、日本側の論文は今までの中国側研究者の研究成果と中国側史料をほとんど参照することなく完成されている。一方、中国側の研究報告には、日本側の史料と研究成果が大量に用いられている。すなわち、両国の歴史解釈には多様な相違点がみられるが、近代の日中関係史研究は日本側の史料と先行研究に大きく依存している。このような研究状況のなかで、日本側の研究者に中国の研究成果と対話することの必要性を認識させることは容易いことではない。一方、中国側は、必要に応じて日本側史料を利用しているが、史料との対話は必ずしも十分に進められていない。

日中の歴史認識問題を解決する第一歩は、研究者同士が国境を越えて「知の共同体」を構築することである。共同体を構築するために、「共同研究」のなかで、今まで対話の少なかった国史研究者同士の交流を増やすことと、相手の史料や研究成果と対話できる研究者を育成することが重要であろう。

二、「国史」から「歴史」へ

1990年代、日本の大学は「国史」学科を「日本史学科」などへ名称を変更し、大学の国際化に対応してきた。京都大学日本史学専修の紹介文に次のような一節があり、日本の「国史」教育の変化を物語っている。

「日本史学は、この日本列島に生まれ、時とともに移り変わってきた社会や文化を、総体として明らかにしようとする学問分野です。（中略）もちろん日本史学専修でも多くの留学生を受け入れており、彼ら・彼女らにとって日本史は外国史であるわけですから、私たちは「日本人にとっての日本史」ばかりを研究しているわけではありません。また、日本社会・日本文化は孤立して存在してきたのではなく、東洋・西洋の諸地域との関わりも重要な研究テーマになります。そうしたことを含めて、日本の大学で日本の歴史を研究する意味を、改めて考えてみてほしいのです」

日本では「国史」を「日本史」に変更するなかで、中国では1990年に当代中国研究所を設立し、「中華人民共和國史」の編纂と史料の出版、公刊を開始した。「国史」の概念が多く使われるようになり、「国史」を使わなくなった日本と対照的である。もちろん、中国では「党史」との違いを強調するために「国史」を用いることもある。一方、中国では教科書の「中国史」と「世界史」を統合して、「歴史」の教科書が作成され、教育の現場で用いられた。東アジア共通の「歴史」は書けるのか、知の共同体を模索するなかで、その可能性を検証する必要があるだろう。

三、対話できる「国史」研究者を育成すること

近年、大学の国際化にともなって、自国内の「国史」と「世界史」の対話が大きく進展したように思われる。これは留学生を多く受け入れ、留学生に対する教育指導体制を整備した結果でもある。最近では、「世界の中の日本」、「世界の中の中国」などの表現を頻繁に耳にするようになった。しかし、中国における日本研究はまだ発展途上にあり、日本の「国史」と対話できる中国の「国史」研究者はあまり現れていない。双方の「国史」研究者は翻訳史料や翻訳された研究成果を通して相手の研究者と対話しているが、長い間、中国の日本史研究に大きな影響を与えてきたのは井上清の『日本の歴史』であった。この著作は1974年に天津出版社で出版され、日本歴史のスタンダードとなり、2011年には陝西人民出版社から再版され、多くの読者に読まれている。

一方、日本の「国史研究」はアジアや世界とどのような距離感を維持するのか、大きな課題となったが、最近2年の『日本歴史』の掲載論文を検討すれば分かるように、外国史の視点を導入した「国史」研究は少ない。また、毎年9月号の特集「座談会、日本歴史の論点・争点」のテーマは、「御成敗式目四二条論」、「古代女帝研究の現在」、「『昭和天皇実録』を読み解く一戦前期の政治・軍事・帝国」「戊辰戦争研究の現状と課題」などのように、極めて「国史」的であり、中国との接点は少ない。最近では、「昭和天皇実録」をテーマにしたものは、戦前の政治と外交にかかわる内容であり、例年とちがって、中国

との関係が言及されているが、「国史」同士の対話とはいえない。

「国史」の対話はより実質的なものにするために、現在の研究者同士の交流を進めると同時に、10年後、或いは20年後に本格的な国史対話が行えるような環境を整備することが重要である。留学生が増加する今日、双方の研究者が協力態勢をつくり、日本の言語と文化に精通する中国史研究者と、中国などアジアの言語と社会文化に精通する日本史研究者を育成することである。同時に、中国の日本研究の発展に、協力態勢を強化しなければならない。最近私がかかわっている「日中近代史事典」編纂プロジェクトは「国史」同士の対話であり、若手国史研究者のための環境整備でもあろう。

本日の円卓会議は、「教科書」を通して、各国の「国史」の現状を把握することから始まる。報告者の問題提起に続いて、教育と研究の2つの視点から「国史」対話の将来像を描いてみたい。

2015年－16年『日本歴史』掲載論文テーマ

掲載号	テーマ	著者
2015年2月	藤原房前と河内山寺・興福寺福田院 室町期荘園制下の在地勢力と五山制度 天保期水口藩の家中騒動 平時における政軍関係の相克—軍隊の雪害対応を中心に—…吉田律人	谷本 啓 斎藤夏来 荒木裕行 吉田律人
2015年3月	隼人の「名帳」 「申」型裁許状の再検討 江戸町名主馬込勘解由の明治維新 江戸・明治期の日露関係—ロシアイメージを中心に	菊池達也 黒須智之 高山慶子 黒沢文貴
2019年4月	宛所を輻射状とする伊達政宗書状 『寛政重修諸家譜』の呈譜と幕府の編纂姿勢 浜口内閣期における陸軍の対内宣伝政策	羽下徳彦 平野仁也 藤田 俊
2015年5月	中世における誕生日 台湾出兵と万国公法—欧米諸国の対応を中心に—	木下 聡 小野聡子
2015年6月	源経基の出自と「源頼信告文」 後北条領国における新宿立て—原兵庫助訴状の検討— 近世後期の天皇避諱欠画令 戦争芝居と川上音二郎—『壮絶快絶日清戦争』の分析をもとに— 徳川家達と大正三年政変	藤田佳希 山下智也 林 大樹 伊藤俊介 原口大輔

2015年7月	陽成・光孝・宇多をめぐる皇位継承問題 近世西日本の皮革流通と地域―筑前国熊崎村を事例に― 昭和のなかの「明治」―明治百年記念準備会議を中心に―	佐藤早樹子 高垣亜矢 小池聖一
2015年8月	足利義昭の大名交渉と起請文 江戸周辺の地域編成と御三卿鷹場 「精神的共同作戦」としての日独文化事業―一九四三～四四年の日本 における展開―	水野 嶺 山崎久登 清水雅大
2015年9月	山陰道節度使判官の長門守任官 戦国期越後における長尾晴景の権力形成―伊達時宗丸入嗣問題を通して―	松本政春 前嶋 敏
2015年10月	公事方御定書の受容と運用―長崎奉行の「江戸伺」を通して 衛生組合連合会と市制	安高啓明 白木澤涼子
2015年11月	『続日本後紀』の編纂―その原史料を中心に 南北朝期大内氏の本拠地―弘世期を中心に 日露戦前の水道敷設と地方都市政治―岡山市上水道敷設問題をとおし て	多田圭介 平瀬直樹 久野 洋
2015年12月	出羽国の東山道移管と陸奥按察使 佐賀藩築地反射炉と鉄製砲 昭和研究会の組織と参加者	永田英明 前田達男 山口浩志
2016年2月	当任加挙考―平安時代出挙制度の一側面 南北朝末期の醍醐寺三宝院院主と理性院院主―宗助の座主就任の背景 備中―橋領における年貢収納と石代納―安石代と間銀の問題を中心に 明治期陸軍における歩兵科連隊将校団の構造	神戸航介 小池勝也 東野将伸 大江洋代
2016年3月	三好本宗家と阿波三好家―洲本・尼崎会談を事例として 長崎「海軍」伝習再考―幕府伝習生の人選を中心に 日露戦後養蚕業の発展構造―西日本地域の成長と勸業政策・村落	高橋 遼 金蓮玉 加藤伸行
2016年4月	律令官人の朝儀不参をめぐる 織田信長の上洛と三好氏の動向 細川幽齋島津領「仕置」の再検討	虎尾達哉 天野忠幸 畑山周平
2016年5月	阿衡の紛議における「奉昭宣公書」 明治二四年の皇室会計法制定―「御料部会計ノ部」の全章修正	鴨野有佳梨 池田さなえ
2016年6月	足利義昭政権と武田信玄―元亀争乱の展開再考	柴 裕之

	大念仏信仰の近世教団化と宗派間関係—宗派の形成をめぐる諸相 近代東京における寺院境内墓地と郊外墓地	下田桃子 鈴木勇一郎
2016年7月	百済滅亡後における倭国の防衛体制—斉明紀「繕修城柵」再考 揺れる後花園天皇—治罰論旨の復活をめぐって 近世長崎貿易での盈物の取締りと刑罰—長崎天保改革を転換点として 華族の期待と三条実美の政治行動	堀江 潔 田村 航 五味 玲子 刑部芳則
2016年8月	大化前代の隼人と倭王権 安政四年における大廊下席大名の政治的動向—「同席会議」の上申書 提出をめぐって ワシントン条約廃棄問題と統帥権	菊池達也 篠崎佑太 藤井崇史
2016年9月	駿遠両国における今川了俊・仲秋とその子孫 終戦期の平沼騏一郎	星川礼応 手嶋泰伸